

令和 4年 4月 20日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202180052

氏名 長島 真以於

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 ケンブリッジ (国名 英国)
2. 研究課題名 (和文)：アイルランドと12世紀ルネサンス：
異教古典文学の受容およびその翻案の研究
3. 派遣期間：令和 3年 9月 22日 ～ 令和 4年 3月 20日 (180日間)
4. 派遣先機関名・部局名：ケンブリッジ大学 Department of Anglo-Saxon, Norse and Celtic
5. 派遣先機関で従事した研究内容と研究状況

派遣先機関では、Máire Ní Mhaonaigh 教授の指導の下、Lucanus のラテン語叙事詩 *Bellum Civile* (BC) の中期アイルランド語翻案 *In Cath Catharda* (CCath) の成立背景と写本伝承の研究を行った。派遣期間の前半は、CCath に於ける改変箇所の特長探索に取り組み、所謂 12 世紀ルネサンス下で成立した作品同時代の BC 註釈の影響を解明した。学部図書館・大学図書館にて本邦では手に入らない二次資料を閲覧し、またベルリンの Staatsbibliothek を訪れ、未刊行の古註が含まれた複数の BC 写本 (MS lat. fol. 34 等) の調査も実施した。教授とは 2 週に 1 回のペースで面談を続けて指導を受け、その成果を論文 ‘*uair innister isna sdairib – Authorities of (Hi)stories in In Cath Catharda and the Scholarly Milieu of Its Adaptation*’ (『ケルティック・フォーラム』第 24 号) として発表した。

教授の計らいにより、派遣期間を通じて、様々な授業・講義に出席した他、教授陣・ポスドク・博士課程の学生から成る研究会に毎週参加し、未刊行の古アイルランド語写本 Harley 5280 の調査にも携わった。日本では得難い、この古文書学の経験を活かし、派遣期間の後半は CCath の未校訂写本 (Cambridge MS Add. 3082、Trinity College Dublin MS 1337、Royal Irish Academy MS D I 1 等) の現地調査と、写本伝承の研究に取り組んだ。この成果の一部は、欧米各地のケルト学者を招いて開催されたワークショップ *The Medieval Irish Lucan: Text and Context* にて、‘*The Manuscript Versions of In Cath Catharda: A Preliminary Enquiry*’ として口頭で発表した。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性

本派遣で得られた研究成果は、欧米の学術誌に複数の論文として投稿し、それらを活用して博士論文に取り組む予定である。短期的には、後半に従事した CCath の写本伝承の研究について、現地、特にワークショップの場では出会った研究者から得たコメントをもとに更に検討を進め、論文の形に整えていく。今回初めて光を当てた複数の未校訂写本は、いずれも断片ながら合計 27 葉あり、現状唯一の校訂本 Stokes (1909) の行番号にして延べ 3000 行以上を伝えている。そのため、派遣期間中の口頭発表は、一部の重要と思われる異読の報告に基づく ‘A Preliminary Enquiry’ とせざるを得なかったが、この研究の価値については肯定的な評価を頂くことができた。特に受入研究者の Máire Ní Mhaonaigh 教授からは、これを発展させ、投稿論文の執筆を目指すべきであり、引き続き助言を頂ける旨伺っている。従って、今後は、まず未校訂断片の現存箇所全てについてより網羅的な考察を進め、将来的な本文校訂のためのプロレゴメナと、特に重要な未校訂写本の翻刻を発表する予定である。その後は、CCath テキストの写本伝承の正確な理解に基づき、西洋古典の中世アイルランド語翻案の成立過程、ひいては所謂「12 世紀ルネサンス」下のアイルランドと大陸の知的交流の実態を解明することを目指す。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと

第一に、報告者の研究が有意義であるという自信を得たことが挙げられる。本邦では、ケルト学および西洋古典学の研究者が限られ、また派遣先のような学際的な研究機関が存在しないことから、中世アイルランドに於ける西洋古典受容という分野について、専門的な助言を受けることが難しかった。しかし、本プログラムに採用されたことで、当該分野の第一人者である受入研究者から隔週の supervision を受け、研究内容を評価して頂いたのみならず、教授陣・ポスドク・博士課程の学生から成る未刊行の古アイルランド語写本 Harley 5280 の調査チームにも加えて頂くことができた。また、関心分野の近い様々な年代の専門家と出会い、学部やカレッジで、時には自宅での夕食に招かれ、欧米の研究者と対等に議論する機会を得ることができた。この経験は、今後も第一線で研究を続け、日本に閉じ籠らず、海外に挑戦し続けることを志す者にとって、何事にも勝る成果であった。

第二に、悲願であった一次史料の調査を行うことができたことが挙げられる。これまでは校訂本の情報に頼ってテキストの分析を進める他なく、BC および CCath の写本も一部がオンラインで閲覧できるのみで、何より古文書学について実践的な教育を受ける機会に恵まれていなかった。しかし、上述の研究チームに参加し、受入研究者の推薦を得たことで、イギリス、ドイツ、アイルランドの古文書館を訪れ、ラテン語および中期アイルランド語の写本計 13 篇を調査することができた。12-15 世紀に書かれた写本に実際に触れ、研究対象とするテキストを五感で味わい、その成果として、自らが第一発見者となった異読に基づいて研究発表を行うという機会は、本プログラムに採用されたからこそ得ることができたものであった。